

# 筆者のブログにてまとめた解説と Q&A のまとめ

## (ひらがな・カタカナプリントについて)

### 【解説第1回、スタート！】

本プログラムは、最初にフラッシュカードで読みを言い聞かせる方法でスタートします。

この方法はよく行われる方法ですが、正しい行い方で「文字と音声をイコールの関係にする」という、文字指導を行う上で非常に重要な要素となっています。

なぜならば、子どもが文字を忘れる時は「どう書くか、どう鉛筆を進めるか忘れる」というだけでなく、「文字の形は覚えているけど、どの音だっけ？」というように、音と文字の関係を忘れてしまうことがあることが、ここまでの研究で分かってきたからです。

### 【以下、マニアック注意】

この指導法は専門的には「刺激ペアリング手続き」と呼ばれる方法です。どんな指導法かというと「時間的・空間的に近接した刺激同士において等価クラスが成立しうる」なんという非常に堅苦しい説明となります。勉強したい方は「刺激ペアリング手続き」「stimulus pairing procedure」でググってください。

### 【解説第2回、スタート！】

前回、カードを見せて読みを言い聞かせる、という指導法を解説しました。この方法はお手軽ですが、その分子どもの集中を維持するのが困難で、効果が低めに出る子がいたりします。

そこで、組み合わせるのが「カードを見せつつ教師が手本を言って読みを復唱させ、徐々に手本を遅らせる」というタイプの指導法です。

こちらは大きく効果が出ますが「言えなかったらどうしよう」というように心配になっちゃう子もいます。そこで、複数種類をコンビネーションで使い、「正解できた！」という経験の割合を増加させることをお勧めしています。

### 【以下、マニアック注意】

この指導法は専門的には「離散試行型指導 : Discrete trial training」と「Progressive Prompt delay」と呼ばれる方法です。この方法、非常に効果が大きいのですが、密度が濃いので負担も大きい。単体で使うのではなく、前回解説した刺激ペアリング手続きと組み合わせて行くと、負担を調整しながら実施できます。

### 【解説第3回、スタート！】

第1回では「カードを見せて読みを言い聞かせる」、第2回では「カードを見せつつ教師が手本を言って読みを復唱させ、徐々に手本を遅らせる」というタイプの指導法を解説しました。

これらだけで十分な子もいますが、さらに「教師が言ったカードを指差す」という指導を組み合わせて行う、あるいは読みよりも少し先行させて行くと、学習がスムーズになる子がいます！

これを反復すると「ああ、この指差したカード、後で読むんだよね」という構えが児童の中にできるので、指差しながら読みを覚えてくれるようになりますことがあります。

### 【以下、マニアック注意】

この指導法は専門的には「MET: Multiple Exemplar Training」と呼ばれる方法です。指差し→発声という組み合わせで反復練習を行うと、指差しの指導のみで初回から発声に成功する子が生じます。

### 【解説第4回、スタート！】

第1回～第3回で、カードを使った読みの指導法を3種類紹介しました。ここでようやく、書きの指導！かと思いきや、まだです！

前駆的なスキルを確認しなければなりません。一番簡単なものとして、、、まずは鉛筆持てますか？

できなければオッケーの手でつまんでから、パタンと倒して持たせると綺麗に待てます。つまむ動きが無理なら、洗濯バサミで遊ぶか、粘土でチネってハリネズミを作りましょう！

鉛筆が持てるようになったら、次は運筆がスムーズにできなければなりません。本書付属の練習用紙を使用して練習してみましょ！失敗体験を積まないよう、拡大コピーしてスタートし、徐々に縮小コピーして難度を上げていくと良いでしょう！

その他、「竹串で粘土に線を描く」「迷路」「塗り絵」など、何でも良いので棒状のものを持って自由自在に動かすという経験をたくさん積んでおきましょう！

その他にも仮名の指導を開始する間にいくつか確認することがあります！

### 【以下、マニアック注意】

特別支援学級在籍児童の視覚と運動の協応に関しては、就学後に大きく成長を見せることがあります。これは恐らく文字の指導の効果であると思われます。

参考：河村優詞 (2021). 知的障害特別支援学級における WAVES の成績傾向と介入効果 日本特殊教育学会第 59 回大会. (電子媒体)

### 【解説第5回、スタート！】

第1回～第3回で、カードを使った読みの指導法を3種類、さらに第4回で運筆の指導などの前駆的スキルの確認、ここまで来てようやく筆記学習の開始です。

しかし、いきなり「さあ書きなさい」と言われても、なかなかエンジンがかからないものです。このような場合、「書く前に少し楽な課題を挟んでから書き始める」というのがオススメです。

そこで本書では筆記の前に線結び課題が少し入っていて、その後、文字を書くような順番になっています。また、気が散りにくいよう、極限までシンプルで低刺激に作られています！

### 【以下、マニアック注意】

専門的には「行動モメンタム」という枠組みで説明できます。行動には勢いがあり、静止状態から新規に行動を生起させるよりも、何かしら別の反応が生じている時の方が反応を生起させやすくなることがあります。仮に本書のプログラムで学習がスタートできない場合、「塗り絵を1枚やった後に仮名をやり、できたら2枚目の塗り絵プレゼント！」というように、低負荷課題でサンドイッチにするとスムーズな子もいます！

### 【解説第6回、スタート！】

第1回～第3回で、カードを使った読みの指導法を3種類、さらに第4回で運筆の指導などの前駆的スキルの確認、第5回では筆記の前に勢いをつける方法を解説しました。

続いて筆記です。筆記学習にはいくつか法則があります。

- ・指書き：どこまで書いたか忘れてしまうタイプの子には、あまり効果が生じない。
- ・なぞり書き：鉛筆を動かす練習としては良い。しかし文字の形は覚えにくい。
- ・視写：なぞりよりも多少、効果が大きい。ある程度スラスラ書けるようになったら、それ以上の回数反復してもあまり効果は増えない。大抵、3回～5回くらいの間に収まる。

これらを踏まえて、本書では、指書きはカット、なぞりは1回のみ、視写も最小限の回数に留めています。(好んで行う場合や、筆順まで厳密に求めるようなハイレベルなケースなら、もちろんやってもOKです)

### 【解説第7回、スタート！】

第1回～第3回で、カードを使った読みの指導法を3種類、さらに第4回で運筆の指導などの前駆的スキルの確認、第5回では筆記の前に勢いをつける方法、第7回は筆記学習の法則を解説しました。

実は、これらの方法だけではなかなか覚えられません。一番記憶上重要なのは、「手本を見ずに書く」ということです。

そこで本書では手本のあるページから1ページめくり、手本を見ずに筆記する部分を用意しています。さらに、テストも反復実施することを推奨しています。

テストと聞くと嫌がられそうですが、本書には記録用紙が含まれており、正答率が高く保てる範囲で進めるので、毎回良い点数が取れます！

**【注：以下、マニアック】**

3C学習法や遅延再生手続きと呼ばれる方法です。測定方法にもよりますが、視写に対して最大で6倍くらいの効果になることがあります。

**【解説第8回、スタート！】**

第1回～第3回で、カードを使った読みの指導法を3種類、さらに第4回で運筆の指導などの前駆的スキルの確認、第5回では筆記の前に勢いをつける方法、第7回は筆記学習の法則、第8回では手本を見ずに書かせる指導を紹介しました。

これらの指導によって仮名の筆記ができるようになっても、まだまだ不足があります。

特別支援学級在籍児童の文字習得において最も重要なもの、それは「復習」です。本書の教材は数日前に習った文字までさかのぼって、線結びで復習ができるようにレイアウトされています。

復習、当たり前だと思うかもしれませんが、小学校教育の現場では、単発の授業の質が求められ、復習をスケジューリングが軽視される現状があります。案外、復習の日数を厳密に考える人は少ないのです。

**【注：以下、マニアック】**

筆記を伴わない線結び課題だけで初回学習から1年以上時間が経過した漢字の再生成績が回復することがあります。

**【解説第9回、スタート！】**

ここまでの筆記学習について、「書きたがらない」「投げ出してしまう」という子が生じないように、学習の直後に望ましい結果が生じるよう指導することを本書では推奨しています。

例えば「プリントが終わったら絵本を読める」「紙芝居を読んでもらえる」「スタンプが押せる」等です。何かを糧にして学習を頑張り、その結果として嬉しい思いをする、という経験を積むことは、達成感の基礎を形作ります。

**【注：以下、マニアック】**

いわゆる提示型強化によるマネジメントです。応用行動分析学に基づく学習態勢への介入では基本中の基本で、「逸脱を叱って止める」のではなく、「きちんとしている時に嬉しいと思えるようにする」という指導をして、学習態勢を形成していきます。

### 【解説第10回、スタート！】

ここまでの指導で仮名の清音が習得されたら、次は特殊音です。拗音の習得に困難が生じる子、たくさんいますよね？だからこそ様々な指導法がこれまでに提案されています。

本書で大切にしているがシンプルさです。「点・直線・曲線」の3つで音を表現し、プリントを鉛筆で叩いて拍の数を数え、筆記します。

また、特殊音で表記する語の中にはカタカナで表記する単語も多いので、ひらがなの学習時には完全に習得することを求めず、カタカナ学習の完了までに大体の習得を目指します。

#### 【注：以下、マニアック】

「レスポンスコスト」と言って、反応にかかる負担は罰と同じ効果をもたらします。負担が大きい補助的手段は、自発しなくなってしまうことも多々あります。そこで、子どもが自分で使うための手段は「楽に使えるもの」である必要があります。

### 【解説第11回、スタート！】

平仮名、カタカナの習得が完了したら、今度はその書き分けに進みます。本書ではシンプルに以下の2つの方法で書き分けの指導をすることを提案しています。

- ・カードの分類
- ・単語の筆記

ここで重要なのが、「例の数」です。確実に書き分けを身に付けた単語を量的に増やす必要があります。単語筆記については、カタカナ編のダウンロード教材として、おまけにくっつけておきました！ぜひ使ってください！

#### 【注：以下、マニアック】

学んだことの般化について、これまでにいくつかの方略が知られています。代表的な方略として「Training Sufficient stimulus / responses Exemplar」というものがあります。要するに、書き分けを覚えるには単語例がたくさん必要なのです。

### 【解説第12回、スタート！】

結局のところ、工夫を凝らしても何をして、子どもによって向き不向きがあります。特別支援学級で使うのであればなおさらです。

そこで、本書には記録用紙が付いています。児童ごとに記録をとって、上手く行っているところっていないところを見極め、指導を修正するんです。

個人差の大きい子ども達を相手にするのですから、むしろ、この記録用紙が本体で、他は全てオマケと言っても過言ではありません。

#### 【注：以下、マニアック】

応用行動分析学は機能主義をとり、「何をするか」よりも「どう効いたか」を重視し、上手く行っていないなら効いていないからやり方を変える、という判断をします。

後出しジャンケンのようなものなので、ある意味無敵です。

### 【解説第13回、スタート！】

小学校の先生は丸つけが非常に丁寧です。きちんとプリントが完了したら、丁寧に○をつけてくれます。しかし、学習上重要なことは、丁寧な○をつけるよりも、即時○をつけることです。多少乱雑でも構いませんので児童が字を書いたらすぐに○をつけて称賛したほうが、効果が大きいことが分かっています。

そこで本書のプログラムでは「即時・具体的に・視覚刺激を伴って」というフィードバックを原則としています。ただし、児童がネガティブな状態である時（例えばふざけている、怒っている等）の時は何も声を掛けないことを原則としています。

### 【注：以下、マニアック】

フィードバックから時間を経ると学習効果は大きく損なわれます。遅延大強化より即時小強化が基本です。

### 【解説第14回、スタート！】

指導法をたくさん列挙してきましたが、ある程度のレベルまで行くと「引き算」が大切になります。「指導法AとBとCを組わせて実施して、こんぐらいの効果だった」「どれか削っても効果が同じになる物はないか？」という考え方の検証です。

複数の指導法の間には「相互作用」といって、組み合わせると効果が上がるもの、下がるもの、変わらない物があるんですね。（もっと言うと、人によっては上がるものってのもあります）

その辺は何かしらの知能検査のプロフィールと紐づけられるようなはっきりしたものなら分かりやすいのですが、案外そうはならないこともあったりします。

そこで本書では「一定以上の効果が出て、その中で守備範囲を広げる」という設計になっています。

効果に影響していないものは徹底的に削りまくっています！

### 【解説第15回、スタート！】

例えば、リンゴの絵に対して平仮名で「りんご」と書けるようになり、平仮名の「りんご」をカタカナに直す練習をしたとします。すると、練習せずともリンゴの絵に対してカタカナの「リンゴ」が書けるようになりますことがあります。この現象、便利ではありますが、条件によって生じやすいパターン、生じにくいパターンがあります。本書では教師にこのような知識を要求せず、さらに子どもの誤答を減らすため、「期待はするけど生じなくても大丈夫！」というように構成されています。

### 【注：以下、マニアック】

刺激等価性とノード距離効果に関する研究がベースになっています。仲介する刺激数が増加するにしたがって正反応率が低下することが知られています。そのような現象に対し、共通の刺激または反応との間で等価クラスを形成することで、成績低下を防ぐことができます。この関係を頭の中で描きながら指導するのは結構難しいので、本書は記録を取りつつ手引き通りに進めれば、勝手に成績低下を防げるように設計されています。

### 【解説第16回、スタート！】

複数の有効な指導法を組み合わせたとしても、効果が合計されるとは限らないのが教育実践の面白いところであり、難しいところです。

そこで、指導法を組み合わせつつ、一般的な教師が指導して有効性がはっきり出るのか確認する実用試験が必要となります。

以下の2つの論文は、今回出版したプログラムの前駆的な段階となった実用試験です。特別な訓練を受けたことの無い公立小学校の特別支援学級担任が使用し、実際に有効性が確認されました。その結果を報告する論文が日本自閉症スペクトラム学会機関誌「自閉症スペクトラム研究」に掲載されました。ご興味がある方はぜひお読みください。

・河村優詞 (2022). 特別支援学級における平仮名筆記の指導 —線結び課題および筆記を中心としたプリント課題の効果および社会的妥当性の検討— 自閉症スペクトラム研究, 20(1), 105-112.

・河村優詞 (2023). 多重的な復習を含むプリント課題によるカタカナ指導 —特別支援学級担任への教材提供および助言による筆記獲得— 自閉症スペクトラム研究, 21(1), 57-63.

これらの研究をさらに積み重ね、指導場面での実用ノウハウを蓄積し、それらを反映したバージョンアップを繰り返し、カバーできる児童の範囲の拡大と、教師側の使用しやすさの向上を図ったのが今回出版したプログラムです。

### 【解説第17回、スタート！】

ひらがなの指導と言えば「つ・く・し」などの運筆が楽な文字からスタートすることが一般的でしょう。しかしながら、これがベストとは限りません。

「つ」と「し」って、顔の向きを変えるとほとんど同じ形ですよ。

「く」と「へ」も同様です。

この手の弁別学習を進める時の原則が「見分けやすい刺激からスタートする」と言うことです。運筆が容易で、さらに文字の形状の差が大きい組み合わせで学習をスタートする必要があります。そこで、本プログラムでは「へ・い」「の・ろ」「つ・よ」「り・て」というように形状が大きく異なる文字同士を組み合わせ、字形の混同を防げるように出題順が調整されています。

### 【解説第 18 回、スタート！】

教育界にもユニバーサルデザインの波がやってきましたね。これは大変望ましいことですが、原理的なところが忘れられつつあるなあと思い、しばらく前に建築なんかのユニバーサルデザインをレビューしつつ文字指導プログラムの開発ガイドラインを出したことがあります。

<https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf18/18-303-311-KAWAMURA-2.pdf>

ああ、過去の院生時代の不出来な論文よ、穴の中に埋めておきたい、、という訳にもいかないのです。なぜならば代替品がないのだから、、このガイドラインは漢字向けの物ですが、基本はひらがなでもカタカナでも同じです。これを網羅できるようにプリント類を作っています。

### 【解説第 19 回、スタート！】

結局のところ、もっとも良い指導方法を突き詰めても、復習が絶対的に必要です。教育現場で軽視されているのではここで、「初めて〇〇を学ぶ時の授業」というところばかり焦点が当たり、望ましい復習の方法が検証されることって少ないんです。

↓以下の文献は漢字指導の物ですが、実は刺激間を線で結ぶ課題を一回やっておくだけで、再生成績が改善することって結構あるんですよ。

<https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf21/21-097-105-Kawamura.pdf>

これを平易に言い換えてしまえば「どう書くか忘れる」のではなく「どの文字だったか忘れる」ということ。頭の中に文字は入っているが、どの音とセットになるか忘れる、ということ。もちろん本書ではこの線結びを活用し、最小限の負荷で多重的な復習のプロセスが踏めるように教材がセッティングされています！

### 【解説第 20 回、スタート！】

鬼のように凝った指導を行って成果が出る。それはそれで我々教師としては行うべき仕事のスタイルだと思います。

しかしながら、1日の授業全てを鬼のように凝ることは物理的に不可能です。以前実施した質問紙調査では、個々に応じた授業準備が毎日なされているとは言い難い現状が明らかになっています。

<https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf19/19-077-084-Kawamura-1.pdf>

そこで、本プログラムは、最低限「進捗と量だけは最低限、個別化する」ということを推奨しつつ、守備範囲を広げ、このプログラムだけである程度の範囲の児童に対して有効な指導を行うことを目指したセッティングになっています。

### 【解説第 21 回、スタート！】

この研究は漢字に関するものですが、以前特別支援学級の担任に対し、児童に適したマスの大きさ等に関する質問紙調査を実施したことがあります。

<https://gssc.dld.nihon-u.ac.jp/wp-content/uploads/journal/pdf19/19-231-236-Kawamura-3.pdf>

結果、当然ながら一般的なノートやドリルよりも非常に大きなマス目が適切であると判断されていました。

ケースバイケースであることはいうまでもありませんが、ベースとなる教材は大きなマス目と文字にする必要があります。

しかしながら、逆に小さなマス目に児童が慣れていく、マス目に応じて視覚と運動の協応スキルが上昇していくというのもデータとして明らかになってきています。

そこで本プログラムのひらがな編では、大きなマス目で一回書き、その後マスを少し小さくするという流れにしてあります。

### 【解説第 22 回、スタート！】

近年「UD フォント」と呼ばれる、可読性の高いフォントの使用が進んでおり、特別支援教育の分野では常識になりつつあります。

しかし、細かいことを言うと、この UD フォントについても様々な形状があります。どれも基本的に読みやすさを重視しているのですが、気を付けなければならないのは「書きの方向が分かるか」という点です。

筆を進める方向が分かるような形状のフォントでないと、筆順指示の数字や矢印を見ながら書く必要があり、精度が下がるか負荷が上がるかの二択になってしまいます。

また、UD フォントの中には読みだけを念頭に置いたものがあり、筆記の指導をするには線が細すぎる物もあります。そこで本プログラムでは、筆記する線に関しては筆記の方向が矢印なしでも分かりやすく、かつ太さが十分な UD フォントを用いています。

### 【解説第 23 回、スタート！】

本書の仮名教材には「3C 学習法」「遅延再生課題」と呼ばれる学習方法が含まれていません。

この方法は「手本を見ずに思い出して書く」という課題であり、本書ではページをめくって次のページに仮名を書くことで、手本なしで書くトレーニングを行います。

この方法は記憶に関する効果が非常に高い反面、ミスが生じやすいのも事実です。子ど

もがつかないように、ミスが生じることが想定される場合は直前で「ちょっと待って、一緒にやろう」などと止め、注意を促してから筆記させると良いでしょう。

それからもう一点補足、マスの濃さは本来かなり薄めの方が良いです。

文字のなぞり線、手本の線とのコントラストが大きければ大きいほど、文字を注視しやすくなります。

しかしながら、薄くし過ぎると、弱視児のコントラスト感度では弁別できなくなります。

そこで、本書では多少濃い目のマスの線を採用しています。

また、マスの中の十字線（リーダー）は、書字の修正には使用しにくく、逆に字形に対して妨害的に振る舞うケースが確認されています。そこでリーダーなしのマスを採用しています。

**質問：河村式の仮名プリント、家で使えますか？**

**回答：親子の関係性が安定していて、前向きに取り組めそうなら使えます！**

※ある程度お家の人の指示に従うことができ、日常生活上のスキルが大体獲得されていることが前提です。もしこれらの前提に問題が生じている場合、本書を開始する前にお住いの「自治体名」＋「ペアレントトレーニング」で検索し、トレーニングを受講してみましよう。

その子の特徴やお家の中の環境によって上手く行きやすいやり方は異なりますが、以下のような点を意識してみると良いと思ひましよう。

・習慣化：既に習慣化していることとセットで実施しましよう。例えば毎日おやつを食べる習慣があるなら、おやつを細かい物2つにしまします。例えば「メインのおやつ：煎餅」と「サブのおやつ：小さいチョコ」というような感じですか。そして先にサブのおやつを食べ、その後お勉強をし、できたらご褒美でメインのおやつをあげる、という流れです。お勉強を一生懸命やったら煎餅が2枚になる！なんてのも良いですね！

・環境設定：学習する時に気が散る物はなるべく遠ざけておきましよう。タブレット、絵本、おもちゃ、テレビのリモコンは見えないところに置いておきましよう。

・最初は短時間：いきなり長い時間学習すると続かなくなります。最初はフラッシュカード1枚からスタートでOKです。1日30秒ずつ時間を延ばしていきましよう。

**質問:**鉛筆が持てないけど、どう指導する？

**回答:**まず、「OK」の指が作れるか確認してください。できない場合は以下のような練習をしましょう。

- ・洗濯バサミをつまむ動作で練習する。洗濯バサミを手足にし、牛乳パックなどの厚紙にくっつけて人形を作る。
- ・粘土をつまむ動作で練習する。油粘土が硬すぎるのであれば小麦粉からでOK。ハリネズミの針をチネって作ると、大量につまむ動作の練習ができる。

「OK」の指が作れるようになったら、次のステップです。鉛筆をOKでつまんで、ぱたんと手の甲側に倒せばこれだけでOKです。中指～小指は手を添えて閉じさせましょう。

※ちょっと踏み込んだ回答：この手の感覚運動学習では1日当たりの時間を数日に散らして分散効果を狙いたいところですが、経験上1日の中である程度の時間練習しないと身に付かない子が出てきます。そこで手数の方です。釣りゲーム、焼き鳥屋さんごっこ、人形遊びで雨が降った設定にして傘を差してあげる、太めのコマ、鉄道模型でNゲージサイズの人形と気を並べる、何でもいいので pincer grasp を 30 分以上稼いでみます。その中で選好査定を実施して高選好課題を見つけたら、家庭でも週7日やってもらいましょう。その上で塗り絵と迷路とお絵描き、簡単な折り紙を追加しましょう。塗り絵のクーピーは指の部分を削ってへこませておきましょう！

**質問:**通常学級で「河村式」のプログラム、使える？使えるんならどう使うと良い？

**回答:**使えます。というかむしろ是非使って下さい。開発段階の協力者の中には通常学級の担任も含まれます。文字の記憶に関する各種研究には知的障害を伴わない子も多数参加してくれています。

ただし、一点異なるとすれば、人数が多いため個別指導が全員に実施できないという点でしょう。本書の記録用紙も同様に、せいぜい同時に10人程度までが前提で、それ以上の人数になると記録用紙の記入そのものにもかなりの時間を要してしまいます。

そこで「多層支援」の考え方が大切になります。この考え方はざっくり言うと「全体に対して良い指導をして、覚えられなかった子の数を徹底的に減らす」「その上で、覚えられなかった子に個別指導を実施する」という感じになります。30人学級の場合、「全体へのカードやプリントで覚えられなかった子」というのを大体5人以下に減らすことを目指しましょう。その上で「朝の支度をしている時や授業前の5分休みに呼び出して今日習う仮名を先に教える」「給食の後にちょっとカード学習をやってみる」という程度のうっすらした支援でさらに2～3人程度をカバーし、最後の1～2人は授業中に他の子がプリントを書いている間に張り付いて個別指導する、というように、段階的に支援を行っていきます。

また、知的な障害を伴わない ADHD 児の中には非常に速いペースが「飽き」が生じる児

童がいます。本書のプログラムでは同じレイアウト、同じ絵、同じ言葉に対して仮名を書く練習をするため、「覚えやすいが飽きやすい」という弱点があります。飽きにくさを確保するという意味で、別の挿絵の入ったプリントを併用するのも良いでしょう。

**質問:特別支援学校の知的障害児に「河村式」のプログラム、使える?使えるんならどう使おうと良い?**

**回答:使えます!開発過程には特別支援学校の教員や重度知的障害児も参加しています!ただし、本書よりももっと細かな指導が必要になることがあります。**

第一に、本書のプログラムはある程度視写ができることが前提なので、重度の知的障害児に対してはプロンプトの段階が荒すぎる場合があります。なぞり→視写、といきなり進むのではなく、破線や点線で文字を書いたものをなぞらせ、さらに破線の間隔を広げたり、薄い色にしたりと、より細かくプロンプトのフェードアウトを計画する必要があるケースもあります。(この教材もサポートプログラムとして今後配信します)

また、負荷に関しても過大にならないように注意が必要です。本書には反復実施するテストが含まれていますが、これは児童から選好されにくい(言い換えれば嫌われやすい)課題です。また、やることが分からない時に無反応になる、席を立つ等の事態が想定される場合は先に援助の要求の仕方(例:教えてくださいと言う、手を挙げる)を習得させておく必要があります。

**質問:仮名などの文字指導に関連したアセスメントツール、教えて!**

**回答:大抵が低年齢児なので、担任の立場の場合は関係を悪化させないように、そもそも検査物の負荷を避けた方が良いケースもあります。その点に留意しつつ、客観的に指導する上でアセスメントツールが必要な場合、私が使うことがあるものとしては以下のようなものがありますね。**

・WAVES:書字に関連する視知覚認知能力のアセスメントができる。教育現場にとって嬉しいことに、コピーして使用可能!また、同じく現場として嬉しいポイントが集団実施が可能!ただし、中度~重度の知的障害児へのアセスに使う、床効果で「全指標低い」という結果で、個体内差がつかみにくいことも。また、全編一気に行うとかなり長いので負担に注意。

・DTVP(フロスティック視知覚発達検査):個別検査になるが、WAVESよりももう少し重めの子、低年齢児の個体内差を見やすい。また、絶版本だが訓練法もセットで開発されている。ただし訓練法は大昔の洋書なので、一部絵柄が子どもにギャグとして受け取られることがある。

・ROCFT(レイの複雑図形テスト):色々アレな指導法の効果検証に使われて炎上している

のを見たことがあるが、結構由緒正しきテスト。図形の模写、記憶を扱い、図形の要素ごとに位置と形状に点数をつける。いきなり複雑な図形を見せることになるので、できない見込みがある課題に曝露できるケース（あるいはそれができる関係性が検査者との間にある時）のみに実施することになる。

・DEM：眼球運動の検査。個別実施で数字が読めることが前提。

※他にも STRAW とか URAWSS とかを使う先生もいますが、私はあまり使う機会が無いですね。

**質問：河村式の仮名プリント、幼稚園や保育園でも使えますか？**

**回答：第1章でいくつかの前提条件を示しましたので、それらを満たしてから開始しましょう。**

本書に含まれるプリントには絵と文字の等価関係を形成することで文字を覚える仕組みが含まれています。そのため、絵を見て物の名前を言えないレベルの場合、全く学習が進まなくなります。また、一定時間座って課題に取り組めることも前提条件となっています。

※これらの点、上手く指導できない場合は我々が「みんなラボ」の研修、ぜひ受講してみてください！幼稚園の先生向けの「幼児ラボ」という研修もあります！

**質問：通級で「河村式」のプログラム、どのように使うと良いか。**

**回答：通級で使うときに最も気を付けるべきは復習のスケジュールです。**

通級の先生は「個々の認知特性に応じた指導」というのがきちんと根付いているため、授業内で特性に応じることにフォーカスすることが多いです。これは非常に良いことで、指導成果を左右する要因です。

しかし、復習のスケジュールはそれ以上に記憶に大きな影響を及ぼすことがあります。通級の特徴として生じざるを得ない絶対的な弱さが復習のスケジュールリングの困難さです。週に1回ではまず記憶が持ちません。（というか、1週間に1回で記憶が持つぐらいなら別の困難の所在にフォーカスすべきです）

そこで家庭学習のマネジメント、宿題を見る保護者の支援など、通級外での学びをどうコーディネートするか、という点が大切になります。

**質問：特別支援学級で「河村式」のプログラム、どのように使うと良いか。**

**回答：特別支援学級では集団指導と個別指導のハイブリッドが大切です。**

特別支援学級では小集団に一斉指導を行うタイプの先生が多々います、これはこれで児童の仲間関係を形成し、友達同士の言語交流を稼ぐ上で大切です。しかしながら、同じ1年生でも数学年にまたがるような能力差があることも少なくありません。

そこで重要なことが個別学習と集団指導のハイブリッドで授業を進めることです。複数名に対して指導を行う学級であっても、徹底的に個々に応じた指導を行う時間をしっかり確保しましょう。

**Q：デイサービスで使用することはできますか？**

**A：刺激量に注意して下さい！**

本プログラムは児童の集中を促進するため、極限まで低刺激で、不要な刺激を排除したデザインになっています。学校ではパーテーションを使用する等の方法で、刺激量を制限する支援方法が普及しつつあります。

しかしながら、放課後等デイサービスは余暇の支援の色彩が強い施設もあり、そのような場合、刺激量の制限というよりは、興味のあるものを多数提示するような刺激環境になっていることも多々あります。

本プログラムを使用する場合は、パーテーション等で空間を区切り、集中への支援策を講じた上で実施すると良いと思います！